

時事問題解説 NO.1

円・ドル・マルク

栗田房穂

通貨不安の本質，根因は何か。新たな展望はあるのか。ふらつく基軸通貨ドル，安定度抜群のマルク，台頭する円——この三通貨を軸に，ブレトンウッズ体制崩壊に始まる混迷の世界通貨情勢とフロート制下の危機の構造にメスを入れ，併せて通貨安定の可能性を探った。



KYOIKUSHA

入門新書

粟田 房穂 (あわた・ふさほ)

昭和15年神戸市生まれ

一橋大学商学部卒

昭和38年朝日新聞社入社

現在、東京本社経済部記者として国際通貨、金融問題を担当

円・ドル・マルク／時事問題解説・1

著 者——粟田 房穂

発行者——高森 圭介

発行所——株式会社 教 育 社

販 売——教育社出版サービス株式会社

〒102 東京都千代田区富士見 2-11-10 丸十ビル

電話 (03) 264-5477 (代)

(分)1233 (製)71301 (出)1498 © 教育社 1978年

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

円・ドル・マルク

目次

概	要（国際金融と三通貨）	7
	国際金融とは／為替レート／国際通貨体制の崩壊／通貨不安の主役はドル／マルクの安定／円への期待	
第1章	概観Ⅱ円・ドル・マルクをめぐって	19
1	円高相場の構造	19
	棒上げの円レート／円高の背景／為替レートの決り方／投機のマトにされた円	
2	三通貨協定の可能性をさぐる	32
	強いマルクと弱いドル／浮上したローザ構想／基軸通貨の条件	

第2章	歴史Ⅱ混迷の国際通貨情勢	43
1	ブレトンウッズ体制の崩壊過程	43
2	米・英・仏三国通貨協定／ブレトンウッズ体制／ドルのたれ流し	53
3	揺れる欧州通貨	61
4	ポンド危機とフランの敗北／投機圧力でマルク切上げへ	61
5	円の胎動	61
6	一ドル＝三六〇円の利点／強い円への歩み	66
7	多角的通貨調整へ	66
8	「基礎的不均衡」の問題点／ニクソン・ショックとその波紋／短命だったスミソニアン合意	75
9	国際舞台に登場するまでの三通貨	75

一ドル＝一円から出発／国際通貨への道を歩んだドル／崩壊の危機を乗り越えたマルク

第3章 現状Ⅱフロート下の三通貨……………85

1 フロート制の登場……………85

総フロート時代へ／フロートの国際収支調整機能／フロート制の変質

2 揺らぐドル……………93

石油危機とドル／産油国のジレンマ／「ドル残高」／米国の国際収支構造／米国の通貨戦略

3 “へび”のなかのマルク……………110

EC共同フロート／慢性的切上げ症状のマルク／マルク上昇と西独経済

4 円の国際的地位……………119

フロート下の円相場／日本の為替政策／為替管理は自由化へ／円の国際化／円
圏の形成

第4章 展望Ⅱ新通貨秩序をめざして……………137

1 新しい国際経済秩序の形成へ……………137

スタグフレーション／先進国の二極分化／三台の機関車／新・国際経済秩序

2 通貨安定のために……………146

通貨改革に向けて／SDR本位制へのカベ／スワップ網拡大と共同介入／複数

基軸通貨制／国際協調の可能性と限界

用語解説……………159

参考文献……………168

概 要（国際金融と三通貨）

国際通貨問題や国際金融と聞いただけで、尻込みする人は結構多いはずだ。耳慣れない専門語がやたら多くて、なにかとつつきにくい印象があるからだろう。だから、国際金融や国際通貨問題は、国内経済の動きとはまったく違う別の次元の問題だと考えてしまう。

たしかに、国際通貨の問題では、いろいろな国がかかわり合うため、つまり互いに異なった政治的主張や利害がからむために、国内経済では通用する経済の原理、原則がそのまま通用しないことが多い。国際舞台で、国際協調という聞こえのよい旗印を掲げながら、その実、相対立する主権国家の利害や思惑が複雑にか

らみあつて、通貨外交が展開されている。このへんの事情を、ニューヨーク連邦銀行の元副総裁で、通貨外交で活躍したクームズは「国際金融は、その性格上当然、相対立する国家利益がぶつかりあう競技場のようなもの」と表現している。その意味で国際通貨問題は、国際政治の問題でもあるわけだ。

実際のところ、こうした国際協調の立場から、国内の政策判断の修正が迫られることはたびたびある。昭和五十三年（一九七八）の日本の経済成長率や国際収支の年度間の達成目標は、対外配慮から打ち出されたことは記憶に新しい。

こうみれば、国際金融の仕組みや国際通貨の動きがわからなければ、国際経済はもちろん、国内の経済政策の動向をも十分に把握できないことになる。現実には、ここ一、二年の円高により、日本の経済政策はかなり変わっている。少しオーバーに言えば、国際通貨体制の動揺は、世界経済を揺るがせ、ついで私たちの生活

にも影響を及ぼすともいえる。

国際金融とは

金融というのは、要するに、資金の余っているものから、不足しているものに、融通する機能や仕組みのことである。国際金融といえば、こうした機能や仕組みが国際間にまたがっている場合をさすといつてよいだろう。ところが、この国際金融には、国内金融にはない特色がある。

第一に、取引の相手方が外国であるため、国内取引にはない特殊な不安や危険がつきまとうこと。このため、取引の結果生じてくる金銭の貸借関係は、直接には決済されず、国際的な金融活動を行っている金融機関（外国為替銀行）の手をわずらわすことになる。

第二は、お互いの通貨が相異していることである。異種通貨の交換、従つて為替レートが常に大きな問題になる。

第三は、各国の主権の存在によつて起こる国際取引の特色として、個々の経済主体の間で行われる取引は、結局は国と国との取引関係、いわゆる国際収支に集約されることである。

第四は、国内金融が中央銀行を頂点とする整然とした管理通貨制度が確立されているのに対し、国際金融の場ではこうした自己完結的な信用システムを持ちえないことである。

こうした特色をもつがゆえに、国際金融の場では国家の利害がしばしば対立する。このため、その対立を通じて、国際通貨体制がしばしば揺らぎ、ときには崩壊の危機に瀕し、その結果、なんども建て直しを迫られてきた。

為替レート

いま世界には一三〇もの通貨があり、それを各国が独自に管理している。それらの通貨と他の通貨に対する交換比率が、為替相場、為替レートである。この為替レートは、一言でいえば、その国の総合的な力を市場関係者がどう判断するかによつて決まる。この場合に、一般的な目安となるのは、その国の収支を示す国際収支の状況や、国内経済のひとつの指標であるインフレ率などである。とはいえ、これらがどう判断されるかは、そのときどきの情勢によつてかなり違ふ。時には政治的ニュースや社会問題なども通貨変動の材料になりうる。

こうしたさまざまな情勢をそれぞれの経済主体がある意味では極めて主観的に判断し、通貨の売買を行う。その点では心理的な要因もきわめて強いのである。

このようにして、複雑かつ微妙な判断のうえで為替相場が決まっていくな。それぞれの経済主体は、時には危険（リスク）を避けるため、時には積極的に投機をねらって、より安全な、より力の強い通貨に向かって、大量の資金を動かす。これが度を過ぎると、国際通貨不安をもたらすわけだ。

一方、この為替レートの変更は、当然のことながら、その国の産業界に大きな影響を及ぼす。円高により国際競争力の弱い業種が深刻な打撃を受けていることは、ご承知の通りである。為替レートの問題は、国内政策を進めていくうえで、無視できない重要なポイントである。

国際通貨体制の崩壊

この国際金融の世界的なワケ組みが国際通貨体制と呼ばれるものである。

第二次世界大戦後の世界経済は、ブレトンウッズ体制と呼ばれる国際通貨体制の下で、繁栄を謳歌してきた。しかし、これが十分に機能したのは、スーパーパワーとしての米国の経済力が圧倒的な力をもっていた一九五〇年代の終りまでだった。米国の経済力の相対的な地位が下落して、ドルが世界にたれ流されると、ドルへの信頼が急速に低下していき、国際通貨情勢は混迷の度を加えていった。そして、この体制はニクソン・ショックとそれに続くスミソニアン合意によって、その幕を閉じたのである。

これにより、世界の主要国はその時々的情勢によって自由に動く変動相場制（フロート制）に移行した。資金の需給関係によって、時々の為替レートが決まるこの制度は、投機的な動きによって、しばしば脅かされた。ジェットコースターのように激しく上下動する為替レートに各国の政府・中央銀行は悲鳴を上げ、この

制度の改善を求める声が強まってきたのである。

通貨不安の主役はドル

このように、戦後の国際通貨体制は、IMF固定制の崩壊から、現在のフロー・ト制へと移ったわけだが、その間に共通してみられる現象は、国際通貨不安が常に米ドルを主役として生じていること、それにもかかわらずドルの基軸通貨としての地位は一貫して存続されてきたことである。それゆえに、ドル価値の先行きに対する不安から、ドルから金、西独マルク、スイス・フランまたは遅ればせながら国際通貨としての地位を上りつつある円などの「強い通貨」へのシフト（乗替え）現象となって現れた。この現象こそ、これまでも国際通貨動揺の主因だったし、通貨体制が改革されない限り、こんごもそれは続きそうである。

このドル不安——国際通貨体制の不安定が続くかぎり、スタグフレーション（不況下の物価高）という資本主義の新しい“病い”を根治することはできない。それなのに、米国政府は、なおドルのたれ流しをやめず、ドル防衛に必ずしも熱心ではない。それどころか、国際収支の黒字を続ける日本、西独に世界景気の先導役を押しつけようとする。もちろん、日本、西独はこうした要請にある程度は応えるべきであろう。米国の通貨戦略の基本的背景を知ることとは、こんごの世界経済の行くえを知ることにもつながる。

マルクの安定

戦後の国際通貨体制は、ドルの強弱によつて大きく揺れ動いてきた。この間、かつて基軸通貨の地位にあつた英国のポンドは、英国経済の没落とともに、栄光